

合併号 特集 - 研修会のプロになる -

今一度、コンピュータ教育を問い直そう 基本理念の再確認を 近藤憲司	1
「メディアコーディネータ研修会」おこなわれました!	2
余田先生の「メディアコーディネータ研修会の役割/マルチメディアといえばバーチャル!」	3
東原先生の「研修計画書作成のポイント」から保証される研修成果	4
スタディノート授業実践 西部小学校の取り組み 水橋渉	5
お米たんけんたいがいく!	10
地域の取り組み 鳥取スタディの会 谷口淳	11
夏・研修会のお知らせ	12
「スタディタイムマルチメディア教材」CD-ROMができました / ECONews登録教材配布します!	14

今一度、コンピュータ教育を問い直そう 基本理念の再確認を

愛知県豊田市立若園小学校 近藤憲司

1 コンピュータ更新はソフト優先か?

今年も、全国の市町村で教育用コンピュータの更新が行われている。小学校は20台から40台への更新である。私を含め、CAIに携わってきた教師には、一人1台の環境が整い、完全習得学習が成立する環境が整うので嬉しい限りだが、実は喜ばない状況もある。それは、更新であるということで、40台のコンピュータを「教育の何に活用するか」という根本的な議論が十分にされず、ハード中心の選定作業が未だにされているという事実である。ソフトは「ワード」と「エクセル」だけというような話しを聞いたこともある。本来なら、「学習にこのソフトを使うから、このハード構成が必要である」という決め方がなされるべきである。学校にコンピュータ導入が始まって10年以上も経つ。進歩のないことが残念でたまらない。

昨年の7月に文部省学習情報課から出された「ミレニアム・プロジェクト『教育の情報化』」を持ち出すまでも無く、コンピュータ室での活用と、これから整備される校内LANで結ばれた教室のパソコンの利用とは、当然主な利用形態は異なる。この辺の活用の根本的な違いをきちっと認識した更新が図られるよう、現場の要望が選定委員に届くような仕組みになっているか確認したい。

2 「ノート」や「タイム」が入っても

次の問題は、研修の問題である。初期のCAI導入校は、そのほとんどが、コースウェアの作成を行った。教材作成(誤答分析)を通して「なぜコンピュータが教室に必要なか」ということを体を通して自然に学んだ。しかし、今は多くの学校には選定委員が議論を尽くして選んだ「タイム」や「ノート」が入ってくる。選定時には多くの議論が戦わされ導入の基本コンセプトがまとめられたはずである。ところが、学校に設置されたとき、一番重要な「なぜ、教育にコンピュータを」という基本認識事項が十分に届かない。最悪の場合、国の整備計画で入ってきたという話しになり、単なる教育機器備品になってしまう。

3 研修でモチベーションを高める

「スタディ」の理念は、中山先生の教育哲学から出ている。この理念をいかにして伝えていくかということが重要である。研修会では「なぜ、教室にコンピュータか」の意義を理解してもらうことが大切である。使わなければならない理由を理解した教師は必ず活用する。日産自動車のゴーン社長が「再生のカギは?」という問いに、「社員のモチベーションを高めた」と答える場面をみた。研修のカギはここにある。

夏の研修会は、ゆったりした日程が組める。この機会に技能的なことばかりでなく、「理念」にかかわる場を確保すると、一層の活用ができると思う。

メディアコーディネータ研修会

おこなわれました！



5月26～27日、シャープ東京市ヶ谷ビルにて21世紀最初の「スタディメディアコーディネータ研修会」が開催されました。なんと今年で11年目となるメディア研は、夏休みを中心に全国各地でおこなわれる研修会を企画運営される先生方のための研修会です。中山先生による新しい学習指導要領についての講演、地域研修会の重点をどこにおくべきか、研修会運営のひと工夫、地域での取り組みの紹介、またスタディシリーズの実践事例紹介や最新情報など、講師の東原先生、余田先生を中心に、内容盛りだくさんの中身の濃い2日間となりました。参加された先生方、大変おつかれさまでした！

参加された先生方の声

自分の研修企画を振り返る大変良い機会になりました。特に「保証される研修成果」については、自分の考えていたものではかなり甘かったと反省し、より詳細に設定しなおすことができました。展開もさらに具体的なものにすることができ、よい研修をしてもらえそうで研修会当日が楽しみになりました。今まで何回も研修会をおこなっていますが、「楽しみ」「待ち遠しい」と思ったことは久しぶりです。

昨年スタディノートの研修を地区でおこないましたが、その後なかなか先生方に浸透していく気配がないので、今年こそは！と意気込んでいたのですが、それは操作に重点が置かれていて、具体的な活用の場や、授業にどう使えるかといったイメージをもたせることが出来なかったためです。もう一度研修計画を

見直して、授業へ活かすヒントを理解して考えられるような研修会にしたいと決意を新たにしました。校内の先生方にネットワークを使うことの意義、価値、おもしろさを体験してもらえよう研修会をしていきたい。

この研修会を通して、この会のネットワーク力を実感するとともに市販の製品とはちがうことがわかりました。子どものためにできることを正しい目をもって選択したいと思います。

「研修の組み立て方は出来るだけ明確に、わかりやすいものを心掛けること」今回特に学んだ大切なことです。

現場を離れて、システム整備ばかりに

気を取られていたことに気づきました。学校現場の先生方の中にリーダーを育成し、充実した研修が実施できるよう体制づくりに努めていこうと考えています。

全国各地に同じようがんばっている人たちがいることが自分の中で再確認でき、たくさんの先生方と知り合いになれてとてもよかったです。このつながりを大切にして、実践に力を入れていこうと思います。



メディアコーディネータ研修会 名語録

※ あんなこともしたい、こんなこともお教えしたいと思いつつも時間がないのですが、何か一つ学校で使えるものを持って帰っていただきたいな、そんなねらいで研修会を企画しています。

(兵庫県神戸市立美賀多台小学校・岡本先生)

※ 授業中、「相談したいのに、先生が遠くにいて聞けない、あそこに居座ったまま」状態は危険なことです。コンピュータの授業だけでなく、プリントをさせているときも、教師が動いていないと子どもはなかなか質問ができないものです。

(和歌山県印南町立印南中学校・久保先生)

※ こんなソフトがあるよと教えるのではなく、「ちょっと触ってみて」というように、先生方に個別にガイダンスするのもいいのではないかと思います。

(同じく久保先生)

※ コンピュータができる人だけでやってはだめなんですね。本当に大切なのは、いろんな人が自由に意見を言えること。「私はコンピュータはわからないけど、教科にはある程度自信があるし、経験もある」と、堂々と言えることが大切だと思います。コンピュータができる人たちでやるのは、本当に簡単なんですよ。できない人がどうやって参加するか、むしろそういう先生たちが大きな顔をして話し合いに参加できる雰囲気を作ること。各学年の先生に「ここの部分、分析して下さい」などお願いして、「中身が問題なんだ」とわかっていただけることが大切なのです。

(沖縄県立教育センター・安和先生)

余田先生の

メディアコーディネータ研修会 の 役割

スタディメディアコーディネータ研修会とは

スタディメディアコーディネータ研修会は、研修会を企画運営される先生方のための研修会です。先生方は、各地域や学校ごとにいろいろと工夫しながら研修会を企画運営されています。私どもは、そうした地域の研修会をお手伝いさせていただき、各々がバラバラに研修会を行うのではなく、企画・運営や指導をされる先生方が一同に会して情報を交換ができる場があれば、研修会はもっとよくなるのではないかと考えました。そして、スタディリソースを導入している地域や学校で開催する研修会の情報交換のための研修会「スタディインストラクター研修会」を1991年にスタートさせました。これが発展して、現在は「スタディメディアコーディネータ研修会」と呼んでいます。

メディアコーディネータ研修会が果たす役割

「もっと先生方にコンピュータを使ってもらいたい」「一緒にコンピュータを活用した授業をやりたい」「仲間を増やしたい」ということが、学校や地域で研修会を開く最大の目的です。そうした研修会を支援するための、またよりよくしていくための、メディアコーディネータ研修会が果たす役割を二つ上げます。

スタディ仲間のネットワークを広げる

スタディを活用しているのは自分たちだけではなく、全国に仲間がたくさんいることを知り、そうした仲間と顔見知りになることで、研修会のスタッフの数が足りない、紹介したい実践例がないという場合も「お願いします」と気軽に言い合えるような関係を築くことができます。他の学校や地域との協同学習を考えると「メディアコーディネータ研修会のネットワーク」を利用できる。

情報交換のチャンス

「どこの誰がどんなことをやっているのか」「こうい

うふうにやれば研修会がうまくいく」という情報をやりとりできる。お互いに役に立つものを交換共有するチャンス。懇親会も含めて、研修会で積極的に情報交換をすることが大切。

余田先生の「研修計画の作成で大切なこと」

動機付けが一番重要

たくさんのことを覚えて帰ってもらおうと思うのではなく、「自分でもできそうだ」「授業で使ってみよう」という気持ちになって帰ってもらうように心がける。そのためには、最低限必要なことに研修内容を絞り、それを繰り返し研修することが大切である。また、自分が行う授業の内容と関連づけ、どの場面で活かそうかしっかりイメージをもって帰ってもらうこと。

操作に関する研修は、当面の授業で
必要な最小限のものだけに絞る

<スタディノートの場合>

ノートについて

文とデジタルカメラの写真で構成される一画面が作成できれば十分である。その他のマルチメディア機能やジャンプボタンは不要。

電子メールと電子掲示板について

デモンストレーションしておけば十分である。操作に関する研修は10分で終わる。むしろ、授業でどのように活用できるか、イメージをもってもらうことのほうが重要。小学1年生が使えるぐらい操作は簡単だけれども、先生の側にどのように活かせばよいかイメージがないため、使いこなせていない学校が多い。

データベースについて

スタディノートの重要な機能ではあるけれども、敷居が高く感じられがちなので、2時間ぐらい時間をかけてしっかりと研修をやってほしい。自分でデータベースを作成できるようになること、自分で情報を加えることができるようになること、親情報・子情報の概念を理解することなどが必要。

この記事は、メディアコーディネータ研修会での筑波女子大学助教余田義彦先生の講義を、ECO News で抜粋して編集したものです。

東原先生の **ちょっとひとこと**

マルチメディアといえばバーチャル! ?

最近、マルチメディアの教材について、誤解が生じています。マット運動のコースを見て、「体育は実際にやらないと...」とか、「てこのはたらき」を体験して「このコースはつまりませんね、やはり自分で実験した方が面白い...」とおっしゃる方にお目にかかりました。マット運動のコースも、てこのコースも、コンピュータが実験方法を教えてくれたり、実技の上手なポイントを教えてくれます。しかし、実験や実技を行うのはあくまでも児童・生徒自身なのです。以前も、こうした質問が全く無かったわけではありませんが、ここ半年ぐらい急にそうした感想が多くなりました。マルチメディアと言うと「バーチャル」という先入観が強いようです。研修会などでスタディタイムの教材体験をする場合には充分注意して下さい。

(信州大学教育学部・東原義訓)

12ページにマルチメディア教材の紹介があります。

東原先生の
「研修計画書作成のポイント」から
保証される研修成果

スタディ研修会では、研修計画案に「保証する研修成果」を明記することになっています。スタディメディアコーディネータ研修会の「保証する研修成果」は、「よし！これで私はよい研修会が開けそうぞ！と自信を持って各地へお帰りいただくこと」です。

保証される研修成果とは

スタディタイムの教材の教師用マニュアルには、「保証する学習成果」という項目があります。当初は「教育目標」と言っていましたが、学習者を主体とするならば、「教育」ではなくて「学習」としたほうがよいと考えました。また「目標」は、達成できなくても努力をすればよいという感じがどうしてもします。そこで、できたかできなかったかがはっきりして、あいまいさが無い「成果」という言葉を採用して、「学習成果」と言うことにしました。「保証される学習成果」と明記した教材で、学習しても点数があがらなかったら、その「保証」は嘘だということになります。「保証する」ということで、作り手側の意識が変わり、できてくる教材の内容がぐんと良くなりました。研修会でも、研修計画や参加要項に「保障する研修成果」を明記することによって、内容をよく検討し、受講生に満足して帰っていただくように配慮することが意識されるようになります。成果が上がらなかった場合には、受講生に研修料を返還しなければならなくなってしまうということになりますよね。

「保証される研修成果」の書き方

客観的に判定できるように書く

「成果」は、できたか否かを客観的に判定できるものである。「保証される研修成果」も、研修終了後に達成できたか否かを客観的に判定できるように書かれていなければならない。曖昧な言い回しをさけ、成果を限定し、できるだけ具体的に表現しなければならない。何ができるようになるのかを行動で表したり、気持ちの上でどう変わるかといった書き方をする。

参加対象を意識する

参加して「なあって、つまらない研修だった」と思われる原因は、参加者のレベルが想定したよりも高かったから。参加要項に書かれた「保障される研修成果」は、それを読んだ人が「自分は参加してよいかどうか」を判断できるように書かれていなければならない。逆に言えば、参加対象を意識していないと「保証される研修成果」を正確に記述することはできない。

スタッフや機材についても考慮する

非常に高度な成果を「保証」する研修会を立案しても、

スタッフや機材の点で実行できない場合がある。自分の地域でできるかどうか、よく検討してから書く。

「保証される研修成果」の良い例

パソコンを使って授業をしてみたいなあ、と思って帰ることができる。キャッチフレーズ「私もしたいな、パソコン授業」

(坂戸市平成13年度パソコン実技研修会)

コンピュータを利用した実践報告を聞き、教育実践のヒントをつかむ。画像入りの意見を提示したり、データベースに登録して意見交換ができる。市内の学校にインターネットメールを送ることができる。「東海ひろば」への参加のしかたがわかる。

(東海市コンピュータ利用実践研修)

東原先生の「全員が満足できる研修会」

指導補助員を多くする。

受講生4人に一人の補助員が理想的。

地域の経験レベルにあった達成目標を立てる。

参加者の実態を事前に把握し、それに応じた計画を立てる。

把握が困難な場合は、募集要項に参加対象がはっきりわかるように書く。

「できていない人」を見つけて、指導できる人に知らせる係を設ける。

操作実習では特に重要。できていないことに気づいてもらえるだけでも受講生の満足度が違う。

作業や発表の機会を必ず設ける。

「スタディタイムの教材を体験し発表する」「スタディノートのノートに書いて、データベースに登録する」など。

明日の授業に役立つ具体的な決心をして解散。

特に校内研修では「コンピュータ室に児童生徒を連れてくる日をスケジュールに記入する」など、決心を行動で表わして終わることが重要。

操作の実習に終わらず、概念・理念と実践例を重視。

操作中心ではなく、受講生がやる価値を実感することの方が重要。スタディは操作ができれば使えると言うものではない。その理念を理解すれば授業で使うようになる。

この記事は、メディアコーディネータ研修会での信州大学教授東原義訓先生の講義を、ECO Newsで抜粋して編集いたしました。

おめでとうございます！

東原先生 教授ご昇進



信州大学の東原義訓先生が平成13年4月より、教育学部教授に昇進されました。おめでとうございます！ますますのご活躍をお祈りいたします。

ECOnewsをどうぞよろしく！

東原先生、原稿を下さ〜!!!

スタディノート
授業実践

西部小学校の取り組み

2年生「リズムをかんじて」

「見つけよう、育てよう、わたしのたからもの わたしのやさしい」

富山県滑川市立西部小学校 水橋 渉

§ 滑川市立西部小学校のコンピュータ環境と
スタディノートとの出会い

6年前、コンピュータ室の設置とそこに一人1台を想定した42台のコンピュータ(サーバ1、教師用1を含む)スタディシリーズ(ライター、タイム、ネット、エバル、ノート)の導入。全てがDOS版で、スタディノートにいたっては、テキストとグラフィック画面が別で、グラフィックは直線と矩形と円の世界。それでも最初の実践、6年理科「電流のはたらき」から、スタディノートは、学び合うことや自分の学習の振り返りを通して自分や学習を深めることができるソフトであると確信し、以来、スタディノートを中心に実践を積み重ねています。また、4年前にはWIN版が開発され、そのとき余田先生からデジタルポートフォリオ作りを助けるマビカ(デジタルカメラ)を紹介され、以来毎年2台ずつ購入して、現在では8台のマビカを利用しています。昨年度、私はメディアコーディネータという立場で、コンピュータ活用の支援者として全てのクラスと関わりました。「全ての担任が、総合的な学習の時間、教科、道徳、特別活動のどの学習でもいいからスタディノートを活用しよう。」これを合い言葉に取り組んだ実践から、教師の構え、はたらきかけを交え、2年生の子供の具体的な姿をおしてその取り組みの一部を紹介します。

実践1 第2学年音楽科「リズムをかんじて
2の2『どうぶつしぜんの森をつくろう』」

音楽の授業で

スタディノートを利用した自己評価

担任の柿沢小百合先生は、音楽のよさや美しさを感じ取りながら豊かに表現を作り上げてほしいという願いを持っておられました。教材「たぬきのたいこ」では、子供たちが拍の流れを感じながら、グループでイメージした歌い方やリズム伴奏を工夫し、学習の振り返りとして、がんばったことや苦労したこと、嬉しかったことなどをスタディノートでまとめました。その際、子供たちに、まず自分たちを写した動画を取り込み何度も見ること、そして思ったことを書くよう指示を出しました。

A児の画面(図1)を見ると、「みんな」という言葉が2回でてきます。自分だけの力ではなく、友達と協力してよりよい表現を創っていったA児の学習や他のよさを認める気持ちが伝わってきます。さら

に、自分たちが取り組んだ表現を動画で取り込み、何度も繰り返し見ているうち、自分たちの表現がよりよくなっていることに気づいていったことが「パワーアップ」という言葉に表現されています。

歌う、演奏する、リズムを感じ表現するなどの音楽的な活動は、その場限りのもので、実際に表現している自分の姿を見ることができません。つまり、普段の自分の音楽的な活動を評価するのはほとんどが他者であって、自分でないということが多々あったと思います。マビカを使うことによって、簡単に自分(たち)の活動をデジタルで残し、スタディノートで取り込むことができます。振り返りの手だてとして動画を利用することによって、自分で自分(たち)の活動を客観的に見つめる自己評価を可能にしたと思います。



図1

教師自身の目的意識が重要

なぜコンピュータやマビカを使うのか

本実践では、子供自身がシャッターを押して、お互いに撮りあい、それを取り込んだグループもあったため、大変画像は荒く、見にくいものもあります。それは、一度に大勢(5、6人)を撮っていたからです。2人ぐらいたとアップになって表情、動作などそういったものがよく分かるのですが、遠くから大勢を撮ったものを画面で見ると、何をやっているのかよく分からなくなってしまいます。子供にそのことを伝えても、被写体に動きがあるため常にフレームの中に入れることが困難だったので、単元の途中には担任や私が撮影しました。その動画は自分を振り返るための手だてとはなりませんが、ただ、子供自身が撮影した動画は、学習の目的をはっきりさせ、子供たちがより学習意欲を高めていったのも事実です。

なぜ、子供がコンピュータを使うのか、使うことでどんな力を身につけるのか、教師が、まず子供の立場に立ち、目的意識をもつことが大切だと実感しました。より高い目的意識をもつために、その資質を高めるために、私はスタディのC A Iの考え方が根底にあると思っています。一人一人にあったはたらきかけ、助言のタイミングや内容など、マルチメディア教材に多くのヒントがあると思います。

子供に自分の考えをもう一步ふみこませる 教師の働きかけ

単元の最後に自分の振り返りをデータベースにして、グループ内評価を取り入れました。B児はA児の取り込んだ動画を見て、「リズムを工夫していますよね。」「足音が入っていて上手だね。」と書き込んでいます(図2)。やはり、動画を何度も繰り返し見たことで、A児の活動の様子をしっかりとらえることができたと思います。ただ、子供たちの評価を見ると、「上手だね。」とか「がんばっているね。」としか書きません。もっと友達のがんばりや工夫に気づかせるなら、例えば「どんなところがすごいと思ったの?それを書いてあげたらいいよ。」などもう少し子供の考えや気持ちを引き張り出すはたらきかけがあればよかったと思っています。この子供たちにはそれにこたえるだけの力があつたのですから。

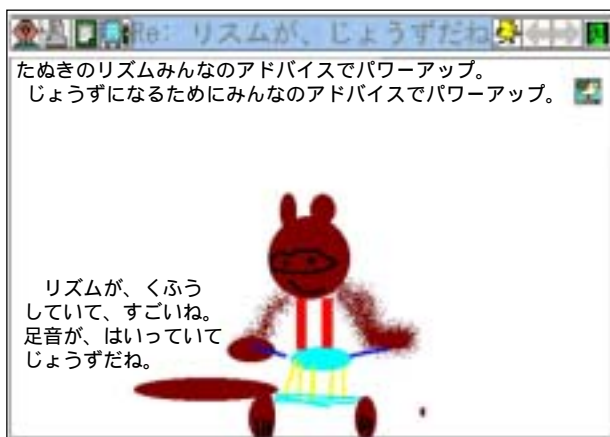


図2

自分のがんばりに気づき、 仲間意識を高める振り返り

C児の画面(図3)を見ると、まず自分たちがどのように取り組み、どんなことを工夫し、どう考えたか、感じたかを書いています。C児のグループは、2つに分かれ、それぞれの表現に取り組みました。普通なら自分の動画のみ、取り込むことが多いのですが、B児の場合、もう一つ別の動画も取り込んでいます。これは、教師のはたらきかけにより、前述の3つの観点で振り返りを行ったので、自分たちの取り組みをしっかりとらえることができたからだと思います。さらに、別々で表現してもそれをあわせないとグループの表現にならないとする見方が育ち、グループ内での自他のがんばりに気づくことにつな

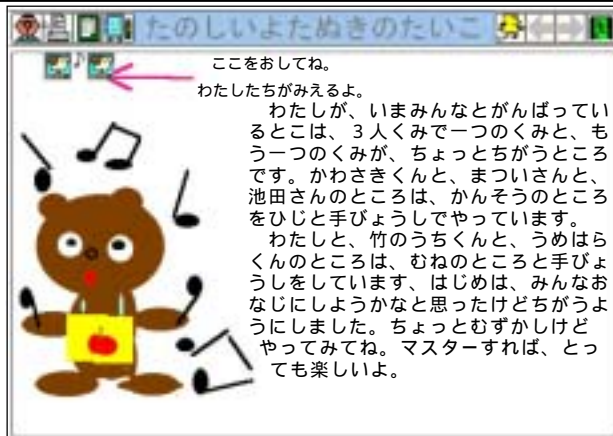


図3

がったと考える。また、「とっても楽しいよ。」との書き込みから、自分が感じた楽しさをみんなに紹介したい、みんなで楽しみたいという、他に積極的にはたらきかけていこうとするC児の仲間意識の高まりを感じます。

実践2 第2学年生活科「見つけよう、育てよう、わたしのたからもの わたしのやさしい」

1年生からの積み重ねで使いこなせる スタディノート

西部小の2年生は、5月の段階で、スタディノートの「ノート」1ページをだいたい20分で仕上げます。これには1年生のときからの積み重ねがあるからです。今年度の1年生は、4月6日に入学して、10日には自分でコンピュータを起動して、2年生が作成した「学校を紹介しよう」というスタディノートのデータベースを見る学習を始めています。そのようにスタディノートを学習の中で活用していくと、子供はいつの間にか、キーボードから文字を拾い、写真や動画を自分で用意し、自分で取り込めるようになります。よく「2年生でここまでやれますね。」と言われますが、それは、日々の学習による積み重ねがあるからだと思います。

子ども自身の目的意識を引き出す 教師のはたらきかけ

ここで紹介する実践は、言わば「野菜観察マルチメディア日記」です。5月に自分が育てたい苗を自分で買ってきて植え、9月に役目を果たした野菜をおさめるところまで、マピカとスタディノートを使って子供たちが延々と記録にとどめていく取り組みです。

毎朝子供は、登校して真っ先に水をやりにいきます。そこに担任の澤井恭子先生がマピカを持って待っています。あるいはコンピュータ室で私がマピカを前にして座っています。子供たちはマピカで撮りたいものがあれば撮ってもいいのですが、2年生だと、友達が撮りたいからとにかく僕も撮りたい、となってしまう。そこには、目的意識がありま

せん。あるように見えて自覚していません。そこで、子供がマビカに手を伸ばした瞬間に、担任の先生が「どこを撮るの?」「なんで撮るの?」と聴くわけです。そこで答えられた子供(目的意識を自覚した子供)がはじめてマビカに触れることができます。つまりマビカで写真を撮るにしてもコンピュータで「ノート」を作るにしても、目的意識があってはじめて学習が深まると私は強く感じています。目的意識がなければわずか1ページのノートですら、1時間かかってできないと思います。そして、撮りたい、打ちたい、そういう思いを膨らませるためにも、生活科の学習そのものが子供にとっておもしろいものでなければならないと思っています。そのために、指導者は子供の育ちをふまえた単元構想を練り上げ、特に導入時におけるはたらきかけが大切だと考えています。

D児の画面(図4)を見ると、「僕は一回目のとき野菜が折れてしまったから支柱に紐をしばって鳥に踏まれないようにしました。紐でしばったら鳥が踏む隙間が小さくなるからです。」と書いています。さらに、自分で撮影した写真を切り抜き、苗の周囲に立てた支柱の部分拡大して張り付けています。これは、「自分の苗を守りたい。」という自分の願いと問題の気づきとそれを解決していく楽しさ(この時点では悩みですが)に気づいたからだと考えられます。ですから、この写真からは、見る者にとってD児の願いが伝わり、D児にとっては自分の取り組みや目的意識を確かにしているととらえることができます。

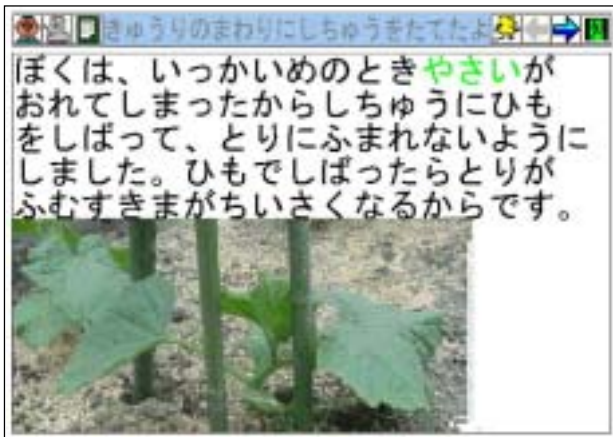


図4

表現手段は

子ども自身が決めることが大切

「ぼくは、みんなのところにわらをしきたいです。」E児にとって、最大の問題は野菜の実に虫がつくことであり、これはクラス全体の問題でもありました。E児は、この問題を解決するために家の人と相談し、解決する方法として畝にわらをしくことにしました。E児はまず自分の野菜の周囲にわらをしき、次に畝全体にわらをしきました。E児の画面(図5)を見ると、自分がしたことがはっきり分かるように写真



図5

をとって、それを取り込んでいます。さらにわらと同じ色を作り、その色で、いったいいくつあるでしょうか。約30個も画面全体に「わら」「わら」と書き込んでいます。ここからは、わらを畝全体にしくことの大変さだけでなく、自分のしたことがクラスのみんなのためになっているんだという、E児の貢献感と他を思いやる優しさを感じ取ることができます。E児はさらに次のページ(図6)でわらをしいた理由とその様子を絵で表現しています。自分で問題に気づいたり切実感をもった子供は、不思議なことに必ずスタディノートのグラフィックツールを使って自分で絵を描こうとします。最初、私は写真があればそれでいいと思っていました。ところが、子供は写真を貼ると必ず次のページに、自分で絵を描きたくてくるのです。写真は確かに目的や願いをはっきりさせますが、やはり自分の願いや考えを自分の手で表現したい意識が低学年の子供には強くあるのです。私は、以前ノートを作る前に「絵はだめだよ。」と言ってしまいそうになったのですが、これを見た時に「ああ、言わなくてよかった。間違っていなかった。」と思いました。表現方法には、テキスト、グラフィック、写真、動画などいろいろあります。それに対して、私たち教師はいろいろな制約もあって表現方法を規制してしまいがちになるのですが、それはあくまで教師の一人よがりな考えなのではないかという思いを深めています。表現方法は子

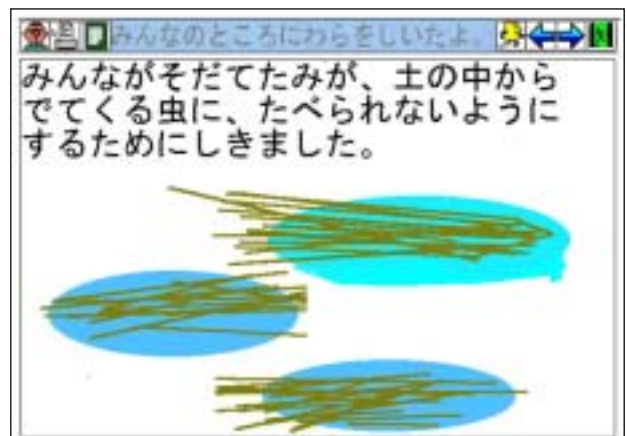


図6

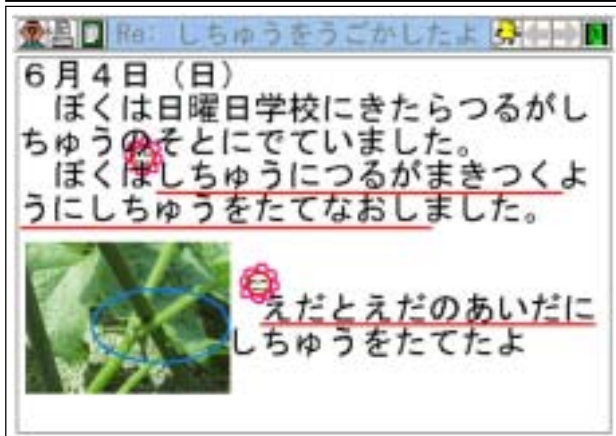


図7

供自ら選ぶ、それがいいのではないかというのが私の考えです。ただ先ほどお話ししたように物理的、時間的な制約もありますから、時と場合によっては写真だけ、絵だけ、などの場合も当然出てくるとは思います。しかし、表現はその子らしさがしっかり表れ、相互に認め合うことにつながるのので、私は、表現方法を自ら選択、決定する活動を大切にしていきたいと考えています。

担任が子どものノートに積極的に関わっていく教師の評価

ある日のF児の画面は「今日野菜を見にいったらつるがはえていました。野菜はうれしいといっていました。」とありました。この日はこれで終わりです。たぶんマビカを貸してもらえなかったのですね。

F児の次のノートを見てください(図7)。担任がノートに「ここがいいね。」という気持ち(評価)を伝えるために「子情報を書こう」の機能を使い、はなまるや赤のアンダーラインを書きこんでいます。このようにデータベースの中で、担任が積極的に子どもと関わっていくことを昨年度から試みています。私も2年ほど前から考えてはいたのですが、余田先生の「ポートフォリオ評価」の講演で、アメリカの学校的具体例を示しながら、教師が子どもの作品に

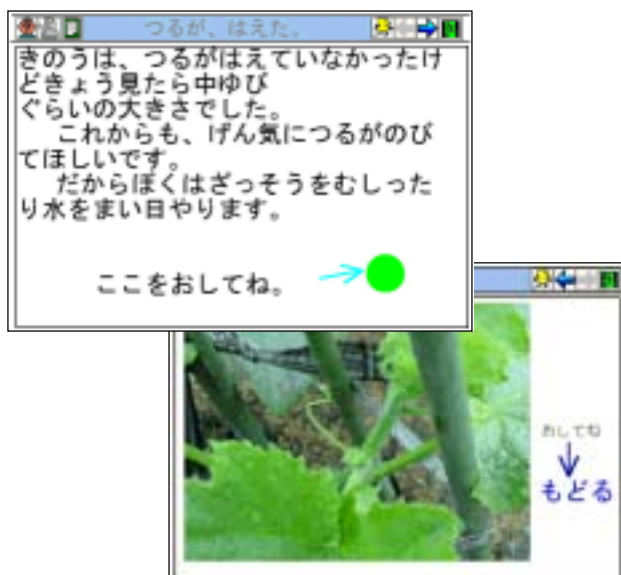


図8

どんどん入って評価を入れていくことを教えていただきました。それを聞いて、さっそく取り組んでみようということで、担任の評価も入れていくようにしました。当初はWAVE(音)で入れたこともありましたが、音だけで聴くと、子どもというのは意外とすうっと聞き流してしまいます。しかし、文字や絵はノートを開いた瞬間に目に飛び込んできます。昨年度の実践を通して見えてきたことですが、何年生までかはわかりませんが、少なくとも低学年は文字や絵の方がいいのではと感じています。つまり、動画だから、音だから、それがいいのではなくて、いったい何が子どものためにいいのか、何のために評価を入れるかを常に考えていかなければならないということ、子供たちから教えられました。

子供が機能を見つけ、教え合う喜び

「昨日はツルがはえていなかったけど、今日みたら中指ぐらいの大きさでした。これからも元気にツルが伸びて行って欲しいです。だから僕は雑草をむしったり、水を毎日やります。『ここを押してね』」(図8)ジャンプボタン機能を一人の子に教えたら、あっという間に伝わりました。スタディノートは、ご存じのように子供の立場で開発されたソフトです。機能を教え込むということはできるだけ避け、子供が見つけたら、教え合ったりすることを大切に、子供たちの意欲を高めています。

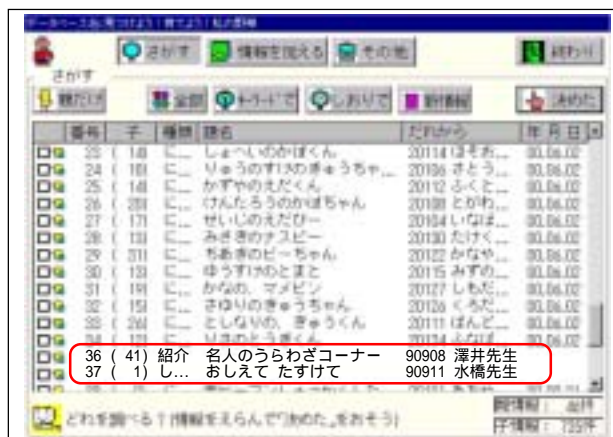


図9

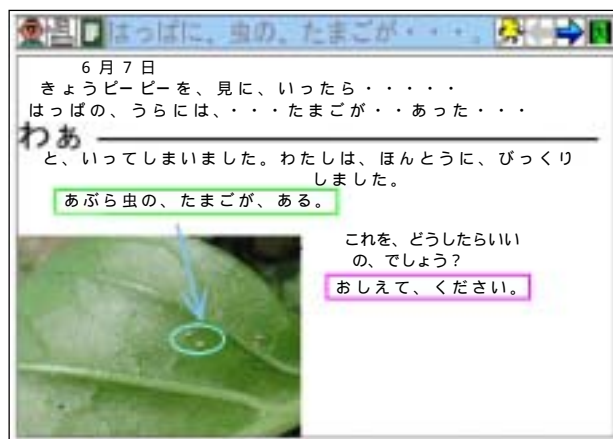


図10

子供の追究を支えるデータベースの活用

子供たちは、活動を続けていくうちに新たな問題にぶちあたります。自分の力だけでは解決できないことにぶちあたります。そこで、支援者の私の考えで「おしえて たすけてコーナー」を作りました(図9)。1件だけ質問が入りました。「今日、ピーピー(野菜の名前)を見に行ったら、葉っぱの裏にたまごがわぁとありました。私はほんとうにびっくりしました。あぶらむしのたまご、これはどうしたらいいのでしょうか。教えて下さい。」とあります(図10)。困っている子はいっぱいいます。ところが、この子しか私が作ったコーナーに関わってきませんでした。それはなぜか。答えは簡単でした。子供たちは、教えて助けてと思ったらどうするかというと、すぐ友達や先生、家の人に聞きます。聞けば問題は解決します。だから、敢えて「教えて」コーナーを利用する必要がありません。「おしえてたすけてコーナー」は、今まで取り組んできた実践でも試みていましたが、子供の立場に立っていなかったこともあったのではと思います。データベースの中だけでやり取りするのではなく、俗にいう“オフ会”、直接会ってのやりとりのほうが子どもにとってはすごく有益で大切だったということをお子たちから教えられました。

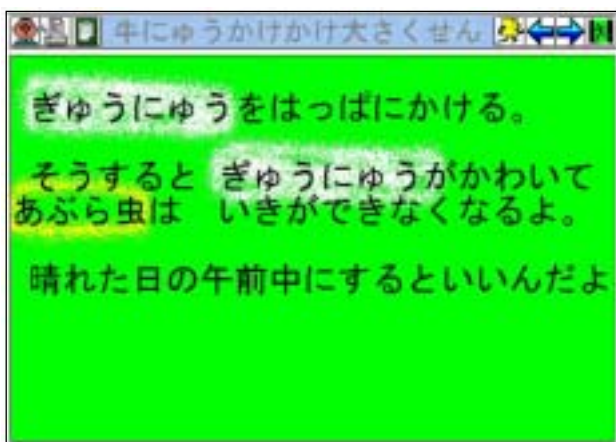


図11

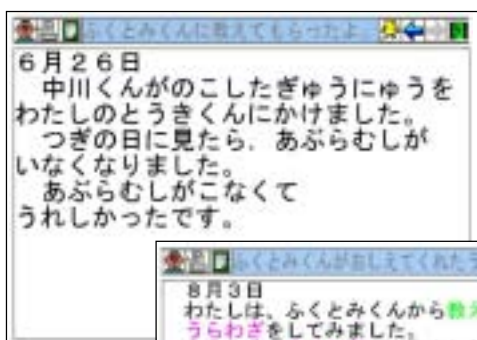


図12

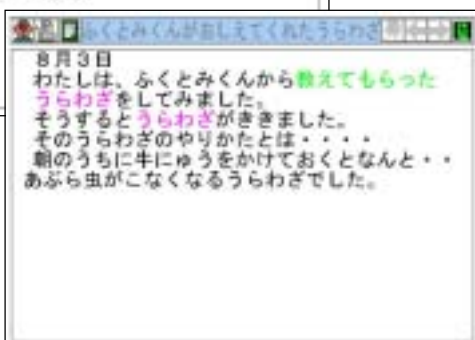


図13

一方、担任の先生が設けた「名人うらわぎコーナー」というものがあります。子供たちは、「どうしたらいいの?」「どうしたらたくさん実がつかれるかな?」と困ったことを直接いろいろな人に質問し、自分の取り組みに生かそうとします。そこで担任の先生と相談し「子供たちが調べてきたことを情報として公開したらいい。」という考えでコーナーを設けました。すると、「かぼちゃの茎をちょんぎるうらわぎ。僕はおばあちゃんから聞きました。一センチくらいちょんぎることです。そのわけは最後のほうを一センチくらいちょん切れば実が早くできるし、おいしいからです」というように、自分が見つけたうらわぎをどんどんどんどん入れていくようになりました。「たすけてコーナー」という考え方と、「うらわぎコーナー」という考え方の違いの中に、コンピュータを本当に学習の道具として使っているかという答えにつながるようなものがあるような気がしています。

この「名人うらわぎコーナー」に子供どうしの関わりが見られるので紹介したいと思います。『牛乳かけかけ大作戦』。ウソだろう?と言われたら私は何も言えません。もしかしたら子どもの調べまちがえかもしれません。一応紹介します。「葉っぱにういたあぶらむしをやっつける方法。用意するもの牛乳。」牛乳をどうすると思われますか?「牛乳を葉っぱにかける。そうすると牛乳は乾いてあぶらむしは息ができなくなるよ。晴れた日の午前中にするといいよ。」これは農家のおばあちゃんに聞いてきて紹介したので(図11)。

「6月26日中川くんが残した牛乳を私のとうきくん(野菜の名前)にかけました。次の日みたら...」(図12)。G児にとっても虫は大きな問題でした。うらわぎコーナーで虫退治の情報を見つけ、給食の牛乳が残ったので、かけてみるとアブラ虫がいなくなりました。ノートの中では自分が気になっていた問題が解決できたと素直に喜びを表しています。また、H児のノートを見ると、「私は福富くんから教えてもらったうらわぎをしました。そうするとうらわぎが効きました。そのうらわぎのやりかたとは、朝のうちに牛乳をかけておくとなんとあぶら虫がなくなるうらわぎでした。」と、まとめています(図13)。これらのやりとりからも分かるように一人一人が調べたことを情報として公開し、相互に利用することで、自他のうらわぎが自分や友達の取り組みを支えていることに気づき、まず友達への感謝の気持ちを高めたと思います。さらに、自分にとって友達は、自分を助けてくれる大切な存在であることに気づいたと、考えます。

子供たちが作る学習の足跡と成果

デジタルポートフォリオは、取り組んだこと、考え

できたこと、学んだことなどその都度自分を振り返ることが出来ます。途中、私と担任で共通理解を図り、子供たちの追究がぐらぐらとぐらついたとき、もう一度自分の記録を振り返る場を、時には個別に時には一斉で設けました。特に最後の振り返りでは、自分の中に学んだこと、育てたことを自分で気づいてほしいと願い、デジタルポートフォリオの最初からじっくりと読み返す場を設けました。

さて、このような学習を積み重ねることで、子供たちがどのような力をつけるのでしょうか、学びの足跡は、どんな見方・考え方を育てるのでしょうか。I児の最後の振り返りを紹介して私の実践報告を終わりたいと思います。

I児の最後の振り返り「10月5日。今までなすちゃんと一緒に暮らしていました。いくら植物だからっておど(いい加減)にするのはかわいそう。生き物はいつか死ぬってお父さんが言っていました。なすちゃんもう疲れたんだ。私も疲れました。」「今日野菜を抜きました。抜く時とっても大変でした。なすちゃんの根っこがしっかり地下まで...」というように、野菜に対してありがたいと言える彼女は、いろいろな意味ですごく「学んだ」と思います。この学習が始まる前は、おそらくI児にとって野菜は、ただの食べ物であったはずですが、それが、約半年あまり、I児が自分の野菜と真剣に向き合い、体をかけ、汗を流したことで、野菜から命を見出し、父の話を思い出して、命の終焉を感じ取り、そして、自分の中には野菜を愛おしみ、そのためには頑張ることができる自分があることに気づく学びや育ちにつながったと思います。

5年間の実践を振り返ると、子供たちは多くのことを私に気づかせてくれました。

自分の追究に楽しさを見い出す子供たちとかかわれたことに感謝し、今後も実践を継続していきたいと考えています。

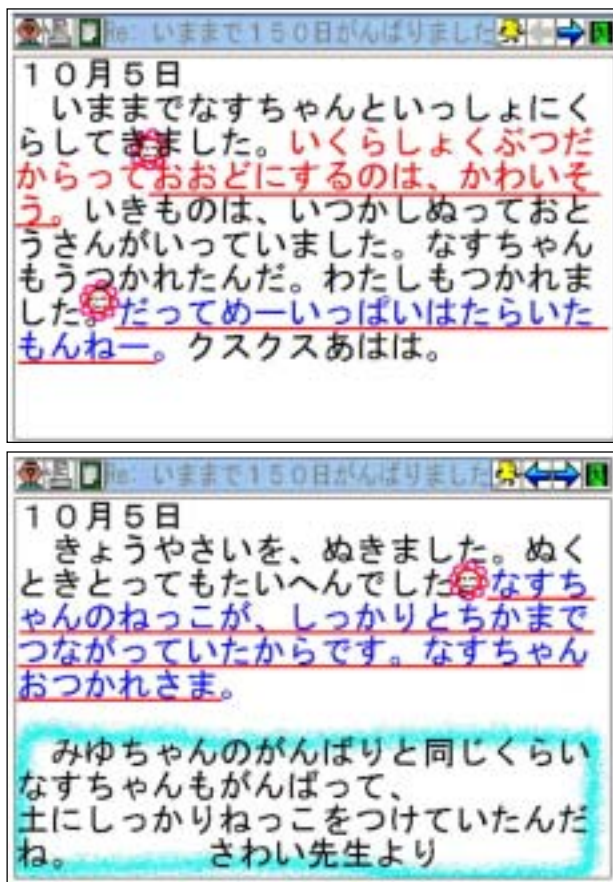


図 14



お米たんけんたい が、いく！

全国の学校が参加する
米作りプロジェクトがスタート！

スタディノートインターネット掲示板を利用して、小学校5年生総合的な学習の時間「米作りプロジェクト」がスタートしました。子供たちから、どんな発見や驚きの声上がるのでしょうか。

プロジェクト名「総合学習における米作り学習(地域差を考える)」

プロジェクトの概要

日本全国で作られているお米。日本の代表的な食物のひとつである。どこでも作られているお米ではあるが、気候や文化の違いなどが影響していないのだろうか？ 普段の生活で身近すぎて考える機会の少なかったかもしれない米作りの工夫を、他地域の友だちと情報交換(交流学习)することで、児童が主体的に調査、探究活動に取り組む姿勢や力の育成を図りたい。お米作りの実体験とインターネットでの情報交換(バーチャル体験)との融合でこれからの情報化社会の方向性なども感じてほしい。やり取りする情報は、それぞれの活動状況や生育情報、その土地ならではの工夫などの予定である。

参加校

岩手県二戸郡一戸町立奥中山小学校

埼玉県鶴ヶ島市立鶴ヶ島第二小学校

長野県松本市立並柳小学校

長野県茅野市立永明小学校

長野県飯田市立山本小学校

三重県美杉村立太郎生小学校

三重県多気郡明和町立明星小学校

兵庫県八千代町立八千代北小学校

鳥取県鳥取市立米里小学校

鳥取県国府町立谷小学校

鳥取県岩美郡岩美町立岩美西小学校

鳥取スタディの会

お問い合わせ先 鳥取市立米里小学校 谷口義昌先生 yonesato-e2@torikyo.ed.jp



地域の取り組み

鳥取スタディの会

鳥取県国府町立谷小学校 谷口 淳

1 発足について

学校統合により開校した鳥取県岩美町立岩美西小学校に42台のコンピュータが導入されたのが平成4年4月。同時に、児童1人に1台の恵まれた環境を生かして「個に応じた学習指導」を実現するためにCAIシステムが導入されました。導入されたシステムは、CAIの最も大切な部分である児童の回答に対する手だてとその応答カテゴリーの分析ができるスタディネット、およびSuper CAIでした。それを機に、町内の数名の教員で自主的な研究サークルがスタートしたのです。

平成5年には、このCAIシステムを町内の他の学校の先生方にも知っていただくよう研修会を開催するようになり、その後、毎年夏期休業中の研修会を続けています。

さらに平成7年からは鳥取県東部地区のすべての小中学校にも案内を広げ、CAIの教育的な意義を中心に、授業体験をしていただきながら研修会を開催してきました。また、主催を「岩美郡小学校教育研究会」にお願いもしながら開催を続けてきました。

学習指導要領の改訂に伴い、「総合的な学習の時間」の新設が叫ばれるようになると、平成10年度からはスタディノートを研修会の中心におき、「総合的な学習に生かすコンピュータの利用」をテーマに変更しました。そして、平成11年には余田先生をお迎えして研修会を開催できることとなり、それまでのスタッフを中心に「鳥取スタディの会」が発足したのです。

2 会の発展

余田先生をお迎えしての研修会は、県小学校教育研究会情報教育部会主催、鳥取県教育研修センター情報教育課に後援をお願いしたところ、スタッフわずか5、6名のところに120名の申込があり、教育研修センターのすべてのコンピュータ研修室を借りて、「コンピュータに初めて触るくらいの人」「操作はできるが交流学习とかグループウェアについてよくわからない人」「だいたいの概念は分かっている人」の3つに分けて開催するに至りました。また、研修会の途中で、「スタディノートメーリングリスト」および「鳥取スタディの会」の活動概要についても説明し、加入を呼びかけました。また、平成12年にも余田先生を再びお招きして研修会を開催することができました。今年度は研修センターの方から「今年は研修センターが主催する研修講座として開催する」というお話をいただきましたので、鳥取スタディの会は側面的な支援をお手伝いさせていただこうかなと思っているところです。こうして会員数も40名にのぼる数となりました。

3 主な活動内容

研修会を開催して、スタディシリーズのもつ教育的な意義を理解くださる参加者も多いのですが、そこで必ずといっていいほど出される意見が、「学校に帰ったらソフトがないのでこのようなことができない」というものでした。そこで、21世紀教育研究所ならびにシャープシステムプロダクト(株)(以下SSP)に協力いただいております。試用版を配布したり、「試用版を持って帰ってはみたけど学校にはサーバがない」「まずは自分のパソコンで使ってみたいんだけど」といったご意見に対して、鳥取スタディの会で出来る限りのサポートをするようにしています。「不安なことわからないことがあったらとにかく言ってください」ということで活動を続け、現在試用版の学校も含めて、かなりの学校がスタディノートを利用しています。

特に本県は交通の便も決して恵まれているとはいえ、SSPによる直接のサポートも直ぐには望めない状況にあります。そこで、SSP、スタディショップにも本会に加入していただき、技術的なサポートと教育情報の提供などもしてもらっています。

具体的には、メーリングリストを通じて、「あっちの学校でこんな実践をしている」「自分の学校はこういうことで困っている」といった情報を交換しあい、場合によってはSSPに解決法を尋ねたりしています。スタディショップも単なる「販売店」ではなく、教員への技術支援をお願いしたり、「こういう実践をしている学校がある」といった情報を知っていただくことで他の学校にも紹介していただくことができます。さらに、こうした活動によって教員同士のネットワークも広がるのではないかと考えています。

授業実践的なことでは、鳥取スタディの会が中心となって、今年の冬は酸性雨ならぬ酸性雪の調査をやるということでインターネット掲示板を立ち上げましたが、残念なことに今年は雪が少なく3回ほどしか交流ができませんでした。また先日は「米作りプロジェクト」が発足し、鳥取スタディの会の会員が中心となって交流学习を進めています。

4 会の今後

このように現在はサポート中心の活動ですが、これからは直接顔と顔を見合わせながらの交流、それから、お互いの学校で作成しているデータを構想中のものも含めて持ち寄って、各学校を回りながら意見を交換し合う会員研修会を開催していきたいと思っています。また、将来的にはホームページを作ってお互いの学校のデータを集約するなどして、学校間交流の橋渡しなどもしていけたらいいなと思っています。



夏・研修会のお知らせ

ホームページ上に教材を載せたい方へ

「Web C A I教材作成合宿」のお知らせ ~インタラクティブスタディへの招待~

ホームページ上に教材を載せたい方に、耳よりの話があります。単なるページめくりではなく、正誤の判定をしてくれたり、点数などによって自動的に適切なページにジャンプすることのできるホームページ作成支援ツールが開発されました。これまでのスタディライターの考え方は継承し、さらに画面アイコンを貼り付けることによりコースの流れを作成できるようにしました。この全国初の研修会が合宿形式で、涼しい信州の高原で開催されます。ぜひ、ご参加ください。

日 程 / Aコース 8月19日(日) 14:00 ~ 20日(月) 16:30 解散 (1泊2日)

Bコース 8月19日(日) 14:00 ~ 21日(火) 15:30 解散 (2泊3日)

会 場 / 長野県更埴市 大池自然の家 長野県更埴市大字八幡 2-620 TEL 026-273-4155

主 催 / 信州大学教育学部附属教育実践総合センター情報分野

後 援 / 更埴市教育委員会

講 師 / 信州大学教育学部 東原義訓、谷塚光典、筑波女子大学 垣花京子 他

内 容 / 新規に開発された「Web上で実行可能なC A I教材」を作成するための新オーサリングシステムを利用しての教材作成を行う。

- ・新オーサリングシステムによる教材作成の紹介 ・新システムで「32-18」を作成してみよう
- ・新システムならではの機能を使ってみよう ・教材作成実習
- ・インターネットを利用した教材の連携の仕組み、および学習履歴の管理 (Bコースのみ)

対 象 / スタディライターの利用経験を有する学生・教育関係者 (定員 A・Bコース計 30名)
経験のない方は必ず経験者と共に参加してください。

申 込 / ホームページからお申込み下さい。

<http://cert.shinshu-u.ac.jp/news/20010819.html> 【締め切り】7月31日

費 用 / 参加費 無料

実費 (施設利用費、宿泊費、食費、テキスト代等) Aコース 8,000円 Bコース 12,000円

【問い合わせ先】 信州大学教育学部 東原先生 TEL/FAX 026-238-4246 higashi@gipnc.shinshu-u.ac.jp

筑波女子大学 平成13年度第一回ワークショップ

スタディノートを中心としたインターネット / 校内ネット利用の授業展開 [ステップアップ研修]

学校教育用グループウェア『スタディノート』の活用を中心に、インターネットや校内ネット(LAN)の授業での有効な活用法を、実践的研修を通して探ります。今回は、スタディノートを授業で使ってみた経験がある方を対象として、情報交換とステップアップ研修を行ないます。

日 程 / 8月9日(木) 10:00 (受付 9:30) ~ 10日(金) 16:00 解散

会 場 / 筑波女子大学 第2情報処理演習室 茨城県つくば市吾妻 3-1

講 師 / 筑波女子大学 余田義彦、山野井一夫、高藤清美

内 容 / ・スタディノートの特徴と背景にある教育理論 ・スタディノート体験 (活用編)

- ・スタディノートの研修会の持ち方 ・スタディノートの活用事例紹介 ・情報交換会
- ・スタディノートのインターネット機能の活用法
- ・スタディノートの様々な機能の紹介 + V 6情報の提供 ・デジタルポートフォリオ

対 象 / 小中学校の先生および教育委員会等の教育関係者でスタディノートを使って授業をした経験のある方

定 員 / 50名 (一校あたりの参加者数は2名までに限らせていただきます。) 【締め切り】7月27日

申 込 / FAX (0298-56-0441) または電子メール (yoden@cs.kasei.ac.jp) でお申込下さい。

申し込みのときに、住所、氏名、所属、連絡先 (電話、FAX、メールアドレス) をお知らせ下さい。

何人かでまとめて申し込まれる場合は、代表者を明記して下さい。

費 用 / 4,000円 (資料代) + 2,000円 (二日分の昼食代)

昼食代の領収書を参加費と分けて欲しい方は事前にご連絡下さい。

【問い合わせ先】 筑波女子大学 余田先生

電話 (0298-58-6288、0298-58-6352) または FAX、電子メールでお願いします。

詳細 <http://www.kasei.ac.jp/eco/kouza/01/ws08090.pdf>

信州大学公開講座

こうすれば見つかる「授業に役立つホームページ」

「ホームページはよく見ているけれど、本当に授業に使えるものがこんなにあるなんて知らなかった。さっそく2学期から使いたい！」と必ず言っていただけの研修会です。必要としているホームページがどうも見つからないと感じている方、児童・生徒がホームページを容易に利用できる方法を探している方、ぜひご参加ください！

日 程 / 8月6日(月)8:30 ~ 7日(火)17:00 解散

会 場 / 信州大学教育学部附属教育実践総合センター 長野市西長野6 - 口 TEL 026-238-4246

主 催 / 信州大学教育学部

講 師 / 信州大学教育学部 東原義訓、谷塚光典、

長野県信州新町信州新町中学校教諭 成田顕宏、松本市立並柳小学校教諭 小林真樹 他

内 容 / ・教育用ポータルサイト(紹介)

・検索のコツと検索ゲーム(実習)

・授業におけるホームページの活用(講演)

・リンク集の作成(実習)

対 象 / 教育関係者 定員40名

申 込 / 所定の受講申込書が必要です。

信州大学教育学部附属教育実践総合センターホームページ <http://cert.shinshu-u.ac.jp/>

の「公開講座参加者募集中」より、PDFファイルで募集要項と受講申込書をご覧ください。

所定の申込書に返信用封筒(宛先明記、80円切手貼付)を同封し、下記に申し込んでください。

〒380-8544 長野市西長野6 - 口 信州大学教育学部学務係

費 用 / 6,800円(食費、宿泊費は含みません)

【問い合わせ先】信州大学教育学部 東原先生 TEL/FAX 026-238-4246 higashi@gipnc.shinshu-u.ac.jp

2001年度コンピュータ教育利用夏期研修会のご案内

< スタディノート・スタディタイムの活用 >

全国最大規模のスタディ研修会です。スタディシリーズから“本当のコンピュータ活用”を探ります。

日 程 / 8月22日(水)10:00 ~ 8月24日(金)15:00 解散(2泊3日)

会 場 / シャープ株式会社人材開発センター 天理研修所 奈良県天理市櫛本町2613-1 TEL0743-65-1321

主 催 / コンピュータ教育利用研究会(代表幹事 阪林良弘)

後 援 / 21世紀教育研究所

講 師 / 21世紀教育研究所 中山和彦、信州大学教育学部 東原 義訓

他 各小中学校の先生(愛知県および近畿2府4県の先生方)

内 容 / 小、中学校におけるコンピュータの活用方法を体験、研究します。

新指導要領(教科教育)対応に向けた「スタディタイム」の活用

・良い教材とは?(内容と授業での活用方法)

総合的な学習の時間における「スタディノート」の活用

・電子メール、電子掲示板、共有データベースの活用研究

対 象 / 小、中学校教職員 および教育委員会の方 コンピュータの経験の有無は問いません。

定 員 / 40名 定員になり次第締め切らせていただきます。

申 込 / 所定の受講申込書が必要です。詳細は、下記へお問い合わせ下さい。

別紙申込書にご記入の上、郵送又はFAXにて事務局までお申込み下さい。

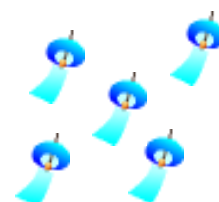
費 用 / 28,000円(宿泊、食事、テキスト、資料代等)

【問い合わせ・申込み先】〒545-8522 大阪市阿倍野区長池町22-22

シャープシステムプロダクト(株)文教統轄営業部内

コンピュータ教育利用夏期研修会 事務局(担当石部)

TEL 06-6625-3233 FAX 06-6624-0764



定員に達している場合があります。ご了承ください。

お問い合わせは、それぞれの研修会へお願い致します。お申し込みはお早めに!

「スタディタイム マルチメディア教材」

CD-ROMができました

各地の学校で作成された、マルチメディアを利用したWINDOWS版の教材が、一枚のCD-ROMになりました。

ふくろ作り(茨城県つくば市立桜南小学校)

被服教材の一斉授業では、児童の進度差が大きく必要な個別指導が十分に出来なかったり、教師が一人ひとりの学習状況を把握しにくい、といった問題点がある。これらから、適当に進めて間違っただま進めてしまう児童も出てきて、製作意欲を損なうことにもなりかねない。そこで、児童一人ひとりが基本技能や製作手順を確実に理解できるCAIコースの開発をすることにした。児童がわからないところは、要求に応じてビデオ、写真、音声、文章などのマルチメディアで提示することができ、確実に技能を習得しながら、ふくろを完成させることができる。

魚から学ぶ私のからだ(信州大学/丸山博美)

コンピュータが示す手順を見ながら、実際に自分の手で魚を解剖していく。動画や静止画で解剖の手順を示してくれるのが“コンピュータ”。困ったとき・わからないとき・できないときの助け舟が“先生”。そして、五感をフル稼働して魚を解剖していくのが“自分たち”。これら3つの要素が揃ってはじめて、この教材の意味がある。

小物づくり(信州大学/加納文香)

はぎれを使ってどんな小物ができるだろう。はぎれをどう切ったら、どういう模様になるだろう。この小物を作っているはぎれ一枚一枚は、どういう形だろう。工夫すれば、一枚のはぎれからいろいろな形や模様の小物を作ることができる。動画や静止画を効果的に利用し、子どもの感性を大切にしたい教材である。

かっこよくまわろう(長野市立篠ノ井西小学校 山本秀樹)

マット運動を初めて学習する児童を対象とした、個のつまずきに対応できる教材。数台のノートパソコンを体育館に持ち込み、マット運動を初めて学習する児童が、技のポイントやつまずきに対応した練習方法を知りたい時に、必要なビデオを容易に提示することができる。模範演技の他、未熟な演技のビデオを提示でき、自分や友達の演技との比較ができる。前転、開脚前転、後転、開脚後転の4つの技を扱い、スローモーションやポイントを示すスーパーインポーズが特徴。MPEGカメラを併用すれば効果的。

宅急便のしくみ(更埴市立更埴東小学校 堀越則夫)

更埴市内に住む小学生の姉弟が、岩手県下閉伊郡山田町に住む従兄弟にりんごを送るというストーリー。宅配便の取扱店、営業所の仕事、トラックターミナルの仕事、働く人の仕事の工夫などを疑似体験していく。活用場面としては、単元の前後など学校の実状に合わせて進めていく。児童が直接目にすることが難しい「トラックターミナル内での仕分け作業」を動画として取り込み、集配車の中や伝票を書く場面で静止画像を取り入れ、よりリアルに学習できるようになっている。

このCD-ROMを無償配布します。ご希望の方は、マルチメディア教材希望と明記し、郵便番号、住所、氏名、電話番号、メールアドレス、勤務先、勤務先でのスタディタイム導入の有無をご記入の上、下記へメールまたはFAXでお申し込み下さい。

[宛先] シャープシステムプロダクト(株)

文教統轄営業部 マルチメディア教材希望係

E-mail/study@ssp.osa.sharp.co.jp FAX/06-6624-0764

[お問い合わせ] TEL/06-6625-3233



ECONews登録教材 配布します!

昨年度21世紀教育研究所では、ECONews登録教材WIN版への移行作業を行ってきました。現在、郵送会員以外の方は、ホームページから教材をダウンロードしていただく形をとってきましたが、今回それら教材を一枚のCD-ROMにまとめました。

このCD-ROMをご希望の方は、封筒に80円切手6枚を同封の上、封筒に「教材CD-ROM希望」と明記して、下記の21世紀教育研究所までお送り下さい。

ECONews 郵送会員登録 年間随時 受付中

ECONewsは、21世紀教育研究所のホームページをご覧になるか、または郵送で受け取ることができます。郵送会員には、年会費1000円で、年6回発行のECONewsとECONews教材CD-ROM、スタディシリーズ試用版CDなどを無償で配付いたします。くわしくは、下記までご連絡ください。

注意 ECONews教材CD-ROMは、希望者のみの配布となっています。申し込みをされる際は申込用紙に教材CD-ROM希望とお書きになるか、その旨を当研究所までお伝え下さい。

水橋先生のスタディノートの実践報告を拝見して、6年前先生が筑波大学に3ヶ月の研修において中山先生の指導の下、スタディタイムのコースウェア作成のための下位行動目標分析に悪戦苦闘されていた姿を思い出しました。授業で児童は何ができるようになるのかを、具体的な行動としてとことん分析したことが、先生の授業を支える土台にあることを感じました。

Educational Research Institute for the 21st Century

21世紀教育研究所

address 〒305-0045 茨城県つくば市梅園2-33-6

TEL 0298-50-3321

FAX 0298-50-3330

e-mail econews@green.ocn.ne.jp

URL http://www.eri21-unet.ocn.ne.jp